

# 「大学基礎講座」の有効性と問題点

## —導入教育から専門教育への展開—

朝比奈 英 夫

### 【I】大学基礎講座の概要と経緯

京都光華女子大学では、新入生対象の導入教育として「大学基礎講座」という学科目を設置している。後述するとおり、当該科目は開講以来7年を閲したところであり、その間に得られた成果には見るべき点が少なくない。これが担当者の熱意と工夫によることはいうまでもないのだが、その一方で、明らかになってきた問題点もまた、少なからず存在するように思う。そこで、本稿では、当該科目導入の経緯を振り返りつつ、その問題点を取り上げることによって、本学の教育全般の中で、導入教育の進むべき方向を見通してみたい。なお、筆者は、大学教育などの教育学に関しての専門家ではないが、平成15（2003）年度以来、「大学基礎講座」の授業を担当してきた。以下の考察は、その体験を踏まえて行うものである。高等教育研究の専門的な見地からは、授業評価に関する分析的な手法に基づく考察として、藤田哲也「京都光華女子大学における導入教育：『大学基礎講座』」<sup>注1</sup>、同「大学基礎講座の授業運営に関する検討」<sup>注2</sup>、及び、伊藤美加「大学基礎講座の授業運営に関する検討Ⅱ」<sup>注3</sup>、同「大学基礎講座の授業運営に関する検討Ⅲ」<sup>注4</sup>が公表されている。

考察を始めるにあたって、まず、「大学基礎講座」という科目のねらいと概

---

注1 『京都大学高等教育研究』第8号、平成14年12月

注2 『京都光華女子大学研究紀要』第40号、平成14年12月

注3 『京都光華女子大学研究紀要』第42号、平成16年12月

注4 『京都光華女子大学研究紀要』第40号、平成17年12月

要とを確認しておく。当該科目のねらいについては、次に掲げる【資料A】<sup>注5</sup>に要を得たまとめがある。

#### 【資料A】

本稿で紹介する「大学基礎講座」は、ノートの取り方、テキストの読み方、図書館の利用、レポートの書き方といった学習スキルを学生に獲得してもらうことを目的に開講されている科目である。ただし、単に学習スキルを伝達するだけが目的ではなく、それらの学習スキルがなぜ必要なのか、そして大学で学ぶということの意味を学生個人個人が考える機会を与えること、つまり、「学び」への方向付けも意図している。従って、上述の山田他\*（2002；Table1<省略：筆者注>）の分類に従えば、「大学基礎講座」は、「b.スキル・方法論型」と「e.オリエンテーション型」にまたがるものといえる。

\*山田礼子・沖清豪・森利枝・杉谷祐美子「私立大学における一年次教育の実際—『学部長調査』（平成13年）の結果から—」（『日本教育社会学会第54回大会発表要旨集録』）

ここに示されているように、当該科目にとってもっとも重視すべきは「大学で学ぶということの意味を学生個人個人が考える機会を与えること」であろう。個々の学習スキルは、こうしたねらいの下に体系化されて、はじめて有効性を発揮すると思われるからである。それでは、授業の内容において、このねらいはどのように具現化されているのであろうか。少し長くなるが、【資料B】<sup>注6</sup>に実際の授業内容を掲げる。

#### 【資料B】

##### 概要

「大学基礎講座Ⅰ」（前期・2単位）では、「講義形式」の授業で求められる学習技能について実践的に学び、自らの学習態度について見つめ直す。また「大学基礎講座Ⅱ」（後期・2単位）では、「ゼミ・演習形式」の授業で求められる学習技能について体験的に学ぶ。グループでの学習・討論を通じて、資料を収集・作成し、プレ

---

注5 注1前掲論文

注6 平成17年度版「京都光華女子大学 卒業学年対象アンケートの解説」より抜粋。下線は筆者。

ゼンテーションを行う訓練をする。

①「大学基礎講座Ⅰ」

4つのテーマを取り上げ、各テーマ2回ずつの講義を行っている。「ノートの取り方」では、板書をただ写すだけの受動的なノート・テイキングではなく、理解を深め、疑問点を発見し、また試験やレポート前に読み返す価値のあるノートの取り方について指導する。「テキストの読み方」では、教科書として指定されている図書や、レポート作成時に資料となる図書の読解を念頭に置き、要約の仕方について指導する。「図書館の利用」では、実際にレポートを書く際などに必要となる、図書館の利用の仕方について説明する。大学図書館の意義の説明、図書の書誌情報の解説を行い、コンピュータを用いた蔵書検索の手順について指導する。「レポートの書き方」では、特定の分野に限らず一般的に必要な文章表現の方法や、レポートの書き方のルール、レポート課題の出題意図の読み取り方について指導する。

②「大学基礎講座Ⅱ」

与えられた課題をこなすだけでなく、自分で問題を発見し、その解決に取り組むための基本的な技能について体験的に学習する。ゼミ・演習形式の授業のためのトレーニングという位置づけである。特定のテーマに対し、5人前後で構成された班ごとに、そのテーマについて調査し、その成果を発表する。その過程で、様々なアドバイスを教員から与えて、演習形式の授業における研究発表のための手続きについて、受講生に自分たちの活動によって理解させる。教員の指示通りに課題を作成させるのが目的ではない。「大学基礎講座Ⅰ」で学んだ「自分で調べ、考える」ための資料を収集する技術、資料を読む技術を応用し、標準的な研究発表の形式に慣れることが目的である。

このように、「大学基礎講座」は、前期科目「Ⅰ」と後期科目「Ⅱ」とからなり、「Ⅰ」は、基本的な学習スキルの習得、「Ⅱ」は、グループ活動を通して発表形式の手法を体験するという内容である。以下、主として、新入生対象の前期科目である「Ⅰ」を材料にして考察を進めていく。

新入学直後という状況に加えて、当該科目のタイトルが「基礎講座」とあることから開講当初、受講生の意欲はかなり高い。具体的には次節で触れるが、そこには、「基礎講座」と称するからには、自分の進むべき専攻分野の学習にとって、この授業の内容は有益であるはずだ、という意識が働いているものと思われる。受講生の側に立って言うならば、すぐに役立つようなことを分かり

やすく教えてくれるのではないかという期待感が大きいということであろう。授業の出発点として、かように積極的な雰囲気が生じているのは好ましいことに相違ない。しかし、当該科目のねらいに即してみると、この状況は、けっして手放しに喜べるものではない。ここで、【資料C】<sup>注7</sup>に拠って、「大学基礎講座」導入の経緯を振り返ってみよう。

### 【資料C】

- a. 2000年度の取り組み 最初に2000年度に課外講座として開講したときには「これだけは！講座」という名称の講座であった。ここでいう課外講座とは、正規の授業として位置づけず、学生も受講登録は必要ない代わりに単位も認定されない授業、ということを目指す。担当する教員も、無報酬のボランティアであった。授業担当の教員は、筆者を含めた教養教育担当部署の3名で、テーマごとにリレー式で講義を行った。3名とも、特に導入教育が専門というわけではなく、筆者は教育心理学が専門で、あとの2名はそれぞれ、フランス文学と中国文学が専門であった。しかし、大学で教鞭を執っている以上、「基礎的な学習スキル」の指導はできるはずであるという前向きな捉え方で、各自が担当することに決定した。(下略)
- b. 2001年度の取り組み 2001年度以降は正規の授業として位置づけ、前期2単位、後期2単位の「大学基礎講座Ⅰ、Ⅱ」という名称の科目とした。さらに前期科目は、併設されている短期大学の学生にも受講できる共通開講とした。2000年度の反省から、「とにかく授業に出席することから始めよう」ということを前面に出し、出席点が成績評価の50%となることを明示し、継続して出席することを促した。開講時間は2000年度と同じ、木曜の5限目とした。

正規の授業とし、短大とも共通開講したため、大学側で296名、短大側で169名の、計465名の受講登録があった。これは対新入生数でいうと、大学の78%、短大の45%に相当する数であった。予想以上に多くの受講登録があったために授業運営が困難になった。(中略)

途中でレポート提出を放棄して単位の認定対象外となった受講登録者の割合は、大学で約8%、短大で約13%であった。また、出席不良や、授業中に説明したはずのレポートの書き方が十分に習得されていないために課題提出をしたにもかかわらず、最終的に単位が認定されなかった者の割合も、大学で約13%、短大で約23%にのぼった。その一方、一度も欠席することなく最後まで受講できた学生の割合は、大学

---

注7 注2前掲論文。

で約51%、短大で約38%であった。

ここに「b.2001年度の取り組み」として挙げられているとおり、当該科目は、平成13（2001）年度から正規の授業として開講したのだが、それに伴って受講生数が大きくふくれあがることになった。しかし、それにもかかわらず、授業を担当する専任教員は、教養教育担当の3名のみで、その他には博士課程在学中の大学院生を非常勤講師として委嘱するという状態が3年続いた。その後、平成15（2003）年度から日本語日本文学科に属する筆者が授業担当に加わったが、全体としては、一般教育担当の教員と非常勤講師とに依存するという状態が現在まで続いている<sup>注8</sup>。

こうした状況の必然の帰結として、授業の内容は、一般的かつ汎用的な内容にとどまらざるを得ない。してみると、いきおい、受講生それぞれが所属する学科の専門性と「大学基礎講座」で取り扱う学習スキルとの関連は希薄になる。まさに、この点こそが、受講生にとっては開講時には高まっていた意欲の持続を困難にし、また、授業担当者にとっては円滑な授業運営を妨げる、主要因のひとつになっていると考えられるのである。

## 【Ⅱ】受講生の関心の所在

前節で述べたことを受講生側の意識に即して検証してみたい。【資料D】は、平成17（2005）年度担当クラス35名を対象に、「大学基礎講座」を受講した感想を尋ねた結果である。最初に授業における第0講から第10講のテーマを掲げておき、質問は、「①興味を持った内容」、「②不満足に感じた内容」、「③自分がうまくいかなかった内容」の3点を問う形で行った。

---

注8 授業担当に関して、非常勤に依存する体制から、各学科・専攻の専任教員が主体となる体制に改めるべきだという指摘が注1に掲げた藤田論文にある。当該科目の今後の展開を考える上で、留意すべきであろう。

## 【資料D】

## \* 大学基礎講座 I の授業内容

- 第0講 オリエンテーション                      第1講 ノートの取り方1 大学での授業とは  
 第2講 ノートの取り方2 実践的ノート術      第3講 テキストの読み方1 説明文の読み方と要約  
 第4講 テキストの読み方2 物語の読み方      第5講 図書館の利用1 図書館ツアー  
 第6講 図書館の利用2 opac等での検索  
 第7講 レポートの書き方1 作文との違い、原稿用紙・ワープロの書式・引用など  
 第8講 レポートの書き方2 レポートの作成手順など  
 第9講 レポート提出及び自己採点      第10講 レポート返却及び「レポート課題2」の発表

- ① 大学基礎講座 I について、興味を持った内容を挙げて、意見・感想を記して下さい。
- ・ノートの取り方や、レポートの書き方を、重要なところや注意したらいいところなどを詳しく教えてもらえてよかった。
  - ・やっぱり、実際大学生活の中で役に立つものに興味を持ちました。ノートの取り方やレポートの書き方など、大学に入りたてで不安だったところを知れてよかったです。レポートは採点して返ってきたので、自分のいい所や悪い所がわかりやすかった。
  - ・要約の仕方やレポートは、大学に入って初めて行うことだったので、授業も興味を持てた。レポートに対する先生のコメントなどがもらえて、とても勉強になった。
  - ・一番興味を持てたのは、第7、8講のレポートの書き方です。どのような言葉を使い、どのような順番で書いたら良いかを、実践を含めてわかり易く説明してくれたので、レポートを作る時にすごく役に立ちました。
  - ・私は第8講のレポートの書き方が良かったと思います。大学で色々なレポートを書く時に役に立ったからです。
  - ・私が一番興味を持ち、為になったと思う内容は、第7講～第9講のレポートについてです。大学に入って最も不安に思うのはレポートで、誰に書き方を教えてもらえばいいのかすらわからなかったので大変助かった。また、出典・引用の書き方は、特に丁寧に教えてもらえてよかった。また、レポートの書き方を教わるだけでは一人よがりの文になりやすいが、自己採点があった為に疑問点が少なかった。
  - ・「レポートの書き方」はとても役に立った。高校の時のレポートは、半分作文のようなものだったので、この授業で教えてもらってなかったら、正式なレポートの書き方がずっとわかってなかったと思う。

- ② 大学基礎講座 I について、不満足と感じた内容を挙げて、意見・感想を記して下さい

い。

- ・ノートの取り方。あまり実践的ではなかった。現にやってみようとは思わなかった。
- ・テキストの読み方は習ったがすぐに忘れてしまい、身につけていない。もう少し役に立つことをやってほしい。
- ・実践型の授業は楽しかったが、ノートの取り方は説明を聞くことが多く、つまらないと感じた。
- ・図書館の利用の仕方を教えてくれるのは親切でよいと思ったが、学校にずっと通っていれば分かることだと思うので、この時間をもっと他のことに使ってほしい。
- ・図書館の利用は大切なことだと思うけど2回もいらなと思った。図書館ツアーはゼミでも行ったし、わけが分からなかった。
- ・不満だった点は、第5・6講の図書館についてである。分かりにくいプリント、そして図書館を見てまわるだけで時間の無駄。もっと実践して見せるとか、詳しく分かりやすい説明をお願いしたい。
- ・第5講「図書館の利用」では、みんなはどうか分からないけれど、私個人的には理解できませんでした。
- ・レポートの書き方が今でもよく分からないので、もう少し丁寧に説明してほしいかった。
- ・レポートの書き方の授業をもう少しやってほしかった。自分が書いたレポートをどうすればもっとよくなるのかを教えてくれる時間があればいいと思います。
- ・レポートが返ってきた時に、点数だけでなく、もう少し細かく採点して返して欲しかった。(どのようにしたらいいか、など。)
- ・マイナス面は、レポートが返ってきたときに、どの点が悪くて、どのように直せばいいかなどをもう少し詳しく書いて欲しかった。
- ・ノートの取り方やテキストの読み方より、レポートの書き方を早めに教えて欲しかった。
- ・順序的にしかたないと思うけれど、レポートの書き方をもう少し詳しく知りたかった。
- ・レポート作成が大学の授業で出されたのももう少し早めの方が良かったです。
- ・全体的に細かすぎて、分かっていることばかりしていて退屈だった。

③大学基礎講座Ⅰにおいて、自分がうまくいかなかったと思う点を記して下さい。

- ・第1・2講のノートの取り方は確かによかったが、実践することがなかった。
- ・ノートの取り方は、確かに役立つと思ったが、実践してみたら時間が足りず授業

- が受けにくかった。もっと自分にあった方法を見つけなくてはいけないと思った。
- ・説明文や論説文は昔からずっと嫌いでこの授業を楽しみにしていたけど、結局分からず今でも苦手です。
  - ・要約の仕方が難しかったです。
  - ・要約の仕方の授業はよかった。でも、要約しやすい例文と要約しにくい例文の差が（自分の中で）激しかったと思うから、もう少し上手く要約できたらよかったと思います。
  - ・資料などを読むことがあまり出来なかった。
  - ・レポートが先生の言うやり方では自分はやりづらかったので少し違うようにしていたらあまり先生から良く言われなかった。
  - ・レポートが上手く書けなかった。
  - ・レポートなどもっと計画的にやればよかった。
  - ・レポートの書き方 例題のようなレポートとはめったに出会わないので、もう少し使える題材がよかった。どうあの型にはめて良いか分からず少し混乱した。
  - ・自分の興味のないものには、積極的に取り組めなかった点。

まず、肯定的な面を問うた①について見ると、掲出したとおり、「ノートの取り方」「レポートの書き方」などが挙がっている。ここからは、受講生の関心が実用に直結する内容に向いているという様子が見て取れる。これに応じるかのように、否定的な評価にも受講生の実用性志向が反映している。質問の②「不満足な点」や③「うまくいかなかった点」に対する回答には、ノートテイキングにしろレポートの作成にしろ、役に立つと実感できることを教えて欲しいという意見がまま見られるのである。

また、特筆すべき傾向として、図書館の利用に関する授業内容について不満足であるという意見が多かったことを挙げねばならない。周知のとおり、図書館の存在は、大学ではたいへん重要なものである。しかしながら、これを一般的な利用法の範囲で説明しても、それだけで受講生の関心を喚起することは難しい。こうした内容を扱う場合にこそ、受講生の所属する学科の専門性に即した利用法を示して、「大学基礎講座」での学習スキルを各自の専門分野での学習へと発展的に応用させる契機とすべきであろう。

以上をまとめると、受講生の関心は、主として、「すぐに役立つ」「実用的で



ある」という面に向けられているといえる。これは、当該科目の目的に適うところでもあり、決して否定的に捉えるべき傾向ではない。むしろ、ここで注意すべきは、実用性を志向する傾向の中で、学力に自信がある層は物足りなさを感じ、自信がない層は細やかさ丁寧さに欠けると感じているという現状であろう。そこで問われるのは、こうした不満や不安感をどのような方向で発展的に解消すべきかということである。

### 【Ⅲ】「レポート作成」における問題点

次に、少し細かい資料を挙げて、述べてきたことを確認したい。57頁～58頁に掲げた【資料G】は、毎回の授業で、出席を取る意味も兼ねて行っている授業アンケートである。ここでは、その平成15年度の結果を集計して挙げている。

集計結果を示した表の右端は、各回の授業に対する総合評価である。まず、授業初回の「0：オリエンテーション」は、4.09と、もっとも高い数値を示している。これは、前述のとおり、「大学基礎講座」に対する受講生の期待の高さを示していると見てよからう。次いで、2回にわたって「ノートの取り方1」、「同2」が続くが、このうち「1」が低い数値を示しているのに対して、「2」は高い数値を示している。そこで、「ノートの取り方」各回の内容を併せて考えてみると、「1」が大学での授業スタイルについての説明を主としているのに対して、「2」ではルーズリーフを使用して実際にノートを取る作業を行っている。すなわち、「1」の回のような説明主体の内容には関心を持ちにくく、「2」の回のように実際に作業を伴うと手応えを感じるという受講生の意識のありようが、各々の評価に反映しているのであろう。

次に、「レポートの書き方」を扱った部分について見てみよう。ここでは、筆者にとって意外な結果が出ている。まず、「レポートの書き方」の第1回は、4.02と数値が高く、受講生の関心が集まっていることが知られる。先の【資料D】①の回答が示しているように、新入生の多くが大学でのレポート作成に不安を抱いている。かような現状から推して、これは当然の結果であろう。また、

この回で扱っている内容が、原稿用紙の使い方や引用のテクニック、参考文献の示し方など、実用的な事柄を多く含むことも、評価の高さに作用しているといえよう。受講生の側に立つと、この回の内容は、高校までの知識の確認と整理に役立って、分かりやすいものであったのだと思われる。

ところが、第2回のレポートの作成手順の説明や、レポートの自己採点という内容になると、受講生の評価は、一転して3.80と低い数値を示している。これはどうしたことだろうか。授業の内容面からみると、数値が低い「レポートの書き方2」の回は、レポート作成の手順として「資料集め→構成→下書き→清書」といった流れを説明している。が、これだけでは新しい知見というべきものを示しにくく、訴えかけるものが少ない。また、これと同時に「レポートの課題をきちんと解釈する」という、いわば論を立てるにあたっての出発点を重視すべきことを説明するのだが、これも一般的な事例に即しての講義のみでは抽象的にならざるを得ない。

このことを受講生の側に即して考えてみると、前述のような授業内容に物足りなさを持つ層と勉強について行けるか不安を持つ層とのいずれにも、「これは役に立つな」という実感を与えられていない、ということであろう。次に挙げた受講生の意見は、【資料D】の質問と同時に、担当クラス35名に「レポートの書き方」の回に対する感想を求めた結果である。ここには、上に述べたような受講生の意識の一端が示されているように思う。

#### ○第7～10講「レポートの書き方」についての感想

- ・引用の仕方がよくわかりません。
- ・事実に基づいた自分の意見というのがよくわからなくて混乱しています。
- ・レポートの例をもう少し見ることができたら嬉しいです。
- ・レポートの書式のところを箇条書きにしてほしかったです。
- ・ワープロの文字設定を間違えないように気をつけないといけないので、もう少し分かりやすい説明をお願いします。
- ・レポート作成に関する情報量が多すぎて、課題提出に不安を感じました。
- ・レポートの書き方はとても大切なことだけど、やっぱりあまりよく理解できなかった。

【資料G】

学科	回生	学生番号	氏名	
<p>今日の授業について、質問をします。それぞれの質問について、                      「非常によい=5」、「よい=4」、「ふつう=3」、「悪い=2」、「非常に悪い=1」                      として、数字を記入して下さい。</p> <p>Q1. 今日の授業に対する、あなたの参加態度の自己評価……………( )</p> <p>Q2. 今日の授業に対する、あなたの理解度の自己評価……………( )</p> <p>Q3. 今日の授業に関する、あなた自身の総合自己評価……………( )</p> <p>Q4. 今日の授業での、教員の話し方（聞き取りやすさ）……………( )</p> <p>Q5. 今日の授業での、プリントの内容……………( )</p> <p>Q6. 今日の授業での、黒板への板書（読みとりやすさ）……………( )</p> <p>Q7. 今日の授業での、教員の熱心さ……………( )</p> <p>Q8. 今日の授業の、内容（質）……………( )</p> <p>Q9. 今日の授業の、情報量（多いか少ないかではなく、適切かという点で）( )</p> <p>Q10. 今日の授業の、分かりやすさ……………( )</p> <p>Q11. 今日の授業内容が、将来役に立つかどうか……………( )</p> <p>Q12. 今日の授業内容に興味を持てたか、刺激を受けたか……………( )</p> <p>Q13. 今日の教員の授業の仕方に対する総合評価……………( )</p> <p>Q今日の授業の総合評価……………( )</p>				
<p>～今日の授業に関する質問・感想・意見などをご自由にお書き下さい～</p> <hr/> <hr/>				

## ○平成15年度 大学基礎講座Ⅰ 感想用紙の集計 (筆者担当クラス約70名)

講 : 内 容	Q. 3 自己評価	Q. 10 分かり やすさ	Q. 11 有用性	Q. 12 意欲の 喚起	Q. 13 教員評価	Q. 総合 授業評価
0 : オリエンテーション 大学基礎講座の目的	3.37	4.13	4.13	4.05	4.27	4.09
1 : ノートの取り方1 大学での授業とは	3.55	3.9	4.04	3.74	4.06	3.84
2 : ノートの取り方2 実践的ノート術	3.88	4.17	4.18	4.05	4.22	4.05
3 : テキストの読み方1 説明文の読み方と要約	3.73	3.89	4.17	3.88	4.14	3.94
4 : テキストの読み方2 物語の読み方	3.46	3.58	4.08	3.98	4.02	3.86
5 : 図書館の利用1 図書館ツアー	3.56	3.91	3.89	3.62	3.91	3.78
6 : 図書館の利用2 OPAC等での検索	3.54	3.93	4.11	3.90	4.01	3.85
7 : レポートの書き方1 作文との違い、原稿用紙・ ワープロの書式・引用など	3.79	3.77	4.37	4.04	4.06	4.02
8 : レポートの書き方2 レポートの作成手順など	3.40	3.65	4.18	3.86	3.93	3.80
9 : レポート提出 採点表による自己採点実施	3.61	3.77	3.88	3.72	3.88	3.73
10 : レポート返却 「レポート課題2」の発表	3.62	3.98	4.31	4.07	4.31	4.02

「レポート提出」で扱う「作成したレポートの自己採点」は、「大学基礎講座」におけるレポート作成練習の目玉というべき内容である。それにもかかわらず、この回の評価3.73は、全10回の授業を通してもっとも低い数値なのである。そこには、習った手順でレポートを作成してみたものの思うような結果が得られなかった、という失望も作用しているであろう。しかしながら、ここで注意すべきは、レポートの書き方の説明を聞き、それに沿ってレポートを作成してみたという一連のプロセスを、自分なりに反省的に捉え直し、その結果得た知識や技法を発展的に活かそうとする意欲が、受講生の意識の中で、さほどには高まっていないということである。

もちろん、【資料D】で挙げたように、一定の満足感を得てさらなる意欲を持ったという意見もある。しかし、数値で見る限り、授業内容がそのねらいに沿った効果を充分には挙げていないといわなければならない。レポート作成は、受講生がもっとも高い関心を持つところであり、かつ、授業担当者の側も指導にもっとも時間と労力を費やす内容である。このことを考慮すると、「レポートの書き方」における授業のねらいと受講者の意識との差異は、全学対象の導入教育である「大学基礎講座」の今後にとって、見過ごすことのできない課題を孕んでいるのではなかろうか。

#### 【Ⅳ】授業担当教員の所見と改善案

それでは、こうした問題を各クラスの授業担当者は、どのように捉えているのであろうか。非常勤講師を含めた担当者6名の所見をまとめたのが、末尾に別掲した【資料H】である。具体的には、質問を3つ用意し、記述式で回答を得た。第1は「基礎講座の指導内容で不十分なところ」、第2は「実際の授業展開で不十分だと感じられたところ」、第3は「授業内容の改善案」の3点である。

6名の担当者のうち、5名が非常勤講師、1名が専任で、それぞれの担当クラスがどの学科にあたるかも示している。ただし、回答の内容に学科間の差異はほとんど見られなかった。寄せられた回答は、大別して4つの範疇に整理す

ることができる。以下、その4つのそれぞれについて、注意すべき所見を中心に見ていきたい。

まず第1として、いずれの回答にも共通してみられた指摘がある。担当者Aが①の回答として挙げた指摘がそれである。該当の所見を次に示す。

“レポートの書き方”に関しては教科書も指導内容も「資料集め→構成→下書き→清書」といった“手順”にすることが中心で、その過程で要求される論理的思考力・文章表現という面での訓練が足りないからか、提出されたレポートの中には、形式は守っているものの、文章のつながりや論理の乱れが多く、内容面でレポートになっていないものが少なからず見られた。どう考えるか、どう書くか、という点ではあまりうまくいかなかったと感じている。

この点についての対応として、担当者Aは③の回答で、「文章表現・論理的思考・情報処理などの基本的スキルを身につける講座と連携をとりつつ、それらのスキルを大学での学習に生かせるよう導いていく」という提言を寄せている。また、担当者Dのいう、次のような指導法も注目すべきであろう。

「短い意見文を書かせる」から始め、少しずつ長い意見文を書かせる。学生が書いた「短い意見文」をすべてプリントにして学生に採点・評価させる、あるいは、討論させる。可能であれば「添削→書き直し」を繰り返し練習させたい。

紹介したこれら2つの提言は、いずれも聞くべきところを多く含む。ただし、実際の授業では、担当者数も添削指導にかける時間も限られていることを考慮すると、これらの提言をそのまま行うには、時間と労力の上でかなりの困難を伴う。実際の授業運営において、こうした点をどのように解決すべきか、さらなる工夫を重ねてゆく必要がある。

第2に注意されるのは、担当者Eが②の回答として寄せた、

あともう1点、不十分と感じられるとえば、担当学科の専門教育にうまくつながるような基礎をつくることができているのか、は悩むところである。

という意見である。同様の意見は、担当者AやDの回答にも見えるところで、これは、大学での学習に対する受講生の意欲や動機付けに大きく関わる指摘だといえよう。第3は、学生のレベルや意欲の差にどのように対応すべきかという点で、担当者Cの回答がそれを端的に指摘している。次のとおりである。

- ・最初がノートのとり方から始まるため、意識の高い学生からはなぜこんな内容をわざわざ講義で扱わないといけないのかという反発がある。
- ・必修科目になっている学科を扱っているため、全員のモチベーションが高いわけではなく、とりわけレベルの高い学生（基礎講座で扱う内容はほぼ常識であると考えられている）に対しての、動機づけが難しい。

担当者Cは、「大学基礎講座」を必修科目としている人間関係学科を受け持っている。しかし、当該科目を必修化していない学科でも、受講率が9割に及ぶことを考慮すると、実情はほぼ同様であると見なしてよかろう。

第4は、担当者Bの回答に見える「レポート内容を見る限りでは、情報ソース明示の重要性が学生に理解されていなかった」という指摘である。これに関わって、担当者Eの回答にある、

Ⅱの授業で、特に今年度・昨年度と、あまりにもインターネットからの情報を吟味せず安易に利用しているのが危険だと思った。

という指摘も注意される。自分が利用する資料の素性をしっかりと吟味することは、学術研究の場では、いわば自明のことに属するのだが、その重要性を大学入学直後の新入生に対して、どのように自覚させるかは、難しい問題である。自らの手でしっかりしたレポートや論文を書く経験を積み重ねてゆけば、おのずと理解される事柄だが、これを口頭での講義で説くだけでは、なかなか実感をもって受け止めてもらうことができない。この点に関しても、授業においてさらなる工夫が求められるところであろう。

以上、授業担当者の所見を4つの範疇に整理して紹介してきた。紙幅の都合で、得られた回答のすべてにわたって、一つ一つ検討を加えることはできなかったが、ここで触れることのなかった指摘や提言にも、傾聴すべき貴重な所見が多数見られる。是非とも、末尾に別掲した【資料H】を通覧し、「大学基礎講座」の現状と課題を具体的に確認していただきたい。

### 【V】専門教育からのアプローチ

これまでに述べてきたことを簡単にまとめておく。最初に取り上げたのは、受講生の意識についてである。すなわち、大学新生である受講生の多くは、実用性志向が強く、即効性のある手段を求める傾向にある。このことは、基礎的な学習スキルを専門分野の研究につなげて発展的に応用する意識の希薄さにつながっていく。これは、つまるところ、全学対象の「大学基礎講座」という科目が、導入教育としては完結しているものの、それだけで終わってしまう危険性を持つということであろう。

次いで紹介した各クラスの授業担当者の所見は、そのような受講生の意識とまさしく対応している。ここに示された見解は、基礎的な日本語力や論理的思考力の未熟さ、専門分野との関連づけのあり方、受講生のレベルや意欲の差への対応、学術研究の基本的ルールを自覚させる必要性を指摘する。これらの指摘は、大学での学習全体の中で当該科目をしっかりと位置づけることができるかどうか、という問題を厳しく提起している。以上が要点である。

個々の受講生が志望している専門分野をも視野に入れた学習の柱があってこそ、はじめて「大学基礎講座」という導入教育のさまざまな学習スキルの意味が理解されるはずである。新生に対して、一回的ではない、持続可能な学習意欲の喚起と、その根底を支える動機付けを行うためには、この点をもっと掘り下げて考える必要がある。

そこで、最後に専門教育への展開について、現在の取り組みの一例を紹介して、本稿の締めくくりにしたい。筆者が所属する日本語日本文学科は、学科の



教育目標として「日本の文化と歴史への理解を深める」、「多角的な思考力と柔軟な感性を育てる」、「豊かなコミュニケーション能力を身につける」という3点を掲げている。これらを踏まえて、教育目標を実現するための施策として、「少人数制による丁寧な指導」と「体験型学習の重視」とを柱に据えた授業展開を行っているところである。平成17年度から設置された「基礎セミナー」は、その施策の一環で、新たな学習体系の基盤となるべき科目として位置づけられる。

その概略を紹介すると、当該科目は、1年生対象の後期科目「基礎Fセミナー」と、2年生対象の前期科目「基礎Sセミナー」とからなり、1年次の後期から2年次の前期にかけて連続した展開を持たせることによって、導入教育から専門教育への橋渡しを円滑に果たすことを目的としている。また、「F」・「S」のいずれも、担当教員と学生とのコミュニケーションを重視し、講義偏重を避けて、適宜、見学・実習を取り入れるという方針を授業運営の根幹に据える。そのために、1クラスを15名程度の少人数で構成し、個々の受講生の学力や志望を確認しながら授業を展開しようと企図しているところに大きな特色があるといえよう。

具体的な内容は【資料I】に掲げたとおりだが、それぞれの要点をまとめると、まず、「基礎Fセミナー」は、本学科の各専門分野についての理解を深め、各自の進もうとする分野を考えるきっかけを得ることを目的としている。これに続いて、「基礎Sセミナー」は、大学で行う学術研究の手引きを目的とする。受講生は、各々の志望する専門分野に即して基本的な研究の手法を学びつつ、3年次以降で各自の進む分野を考える、という設定である。

1年次後半から2年次前半にかけての学習で重視すべきは、「大学基礎講座」のような導入教育で習得した一般的な学習スキルを、所属学科の専門分野である日本語学、日本文学、京都学（歴史文化学）に、どのように当てはめて応用すべきかという点であろう。こうした意味において、「基礎セミナー」の設置は、導入教育から専門教育への展開に有機的な連続性を持たせようとする試みのひとつといえるのだが、もちろん、上述のとおり理想的な展開がすぐに実現するわけではない。実際のところ、「基礎セミナー」担当者の間でも、導入

教育への理解には差があり、したがって、それぞれの担当するクラス間でも、専門性をどの程度もたせるかについては見解の隔たりが大きい。

しかし、大学での学習を手応えのあるものにするために、導入教育と専門教育との両者の歩み寄りが強く求められていることは、いうまでもない。こうした現況の下、先に挙げた学科の教育理念に鑑み「基礎セミナー」が導入されたわけだが、このような試みは、学生の実情をより細やかに見極めながら充実した教育を実践する方途として、今後、ますます大きな意味を持つようになると思われる。稿を結ぶにあたって、かような見地から、日本語日本文学科での取り組みの一例を紹介した次第である。大方のご叱正を仰ぎたい。

#### 【資料Ⅰ】

##### ○基礎Fセミナー（1年次対象、必修）

##### ①テーマと目標 「大学での学びの世界へ」

1. 日本語日本文学科で学習する内容を理解する
2. 大学での授業スタイルと評価方法を知る
3. レポート作成、口頭発表などの手法を学ぶ

##### ②内容 初回のオリエンテーションの後、下記のA群、B群、C群を取り上げるが、各群の具体的な内容や授業での順序・時間数などは、クラスごとに自由に設定する。

オリエンテーション：このクラスで扱う内容、授業の方針などの説明  
担当教員および受講生の自己紹介

A群 小テーマ：日本語日本文学科での学習と研究  
内 容：本学科で扱う専門分野について知見を深め、各自の  
関心を広げる契機とする。

B群 小テーマ：講義と演習  
内 容：授業形態の主流となる講義形式と演習形式の授業に  
ついて、その特色や取り組み方などを考える。

C群 小テーマ：レポートと発表  
内 容：評価の基準として課されることの多いレポート作成  
や口頭発表について、具体的に取り組み方を学ぶ。

まとめ：基礎セミナーでの学習を振り返り、総括を行う。

○基礎Sセミナー（2年次対象、必修）

①テーマと目標 「専門分野における研究入門」

1. 日本語日本文学科の各専門分野について、研究の初歩を学ぶ
2. 各専門分野での研究史、研究方法などを知り、学術研究への知見を深める
3. 各クラスで用意される課題を通じて、専門的な研究の手ほどきを受ける

②内容 初回のオリエンテーションの後、各クラスの担当教員の専門分野に応じて、下記の1～5を取り上げる。各クラスで扱う具体的な内容や授業での順序・時間数などは、初回のオリエンテーションで説明する。

1. オリエンテーション：各クラスで扱う内容、授業の方針などを説明。
2. 各専門分野に関する必須の基礎知識を習得する。
3. 研究方法の初歩的な段階を学ぶ。
4. 関連する諸分野に対して関心を広げる。
5. まとめ：基礎Sセミナーでの学習を振り返り、総括を行う。

本稿の骨子は、第11回FDフォーラム（平成18年3月12日、大学コンソーシアム京都主催）において行った報告に基づく。報告の機会を与えて下さった関係各位に御礼を申し上げます。

**別掲**【資料H】 授業担当者の所見（指導内容、授業改善等についての提言）

（注目すべき部分に下線を施し、文意を損なわない範囲で文体・表現・レイアウト等を統一した）

○担当者A 文学部（日本語日本文学科）担当

①大学基礎講座Ⅰ・Ⅱについて、指導内容で不十分と感じられるところ

- ・“レポートの書き方”に関しては教科書も指導内容も「資料集め→構成→下書き→清書」といった“手順”に関することが中心で、その過程で要求される論理的思考力・文章表現という面での訓練が足りないからか、提出されたレポートの中には、形式は守っているものの、文章のつながりや論理の乱れが多く、内容面でレポートになっていないものが少なからず見られた。どう考えるか、どう書くか、という点ではあまりうまくいかなかったと感じている。同様の事を、後期の基礎講座Ⅱの班活動の発表の際にも感じる。

- ・引用文献の書き方など、各学科間でかならずしも形式が一致しないことや、小説の読み方など特定の領域以外ではそれほど重要でないと思われる内容があるなど、全学共通の科目とはいえ、せつかく学科単位でクラス分けが成されているので、より学科毎の特色が出せればよかったと感じた。

②同科目の授業展開において不十分だと感じられた点

- ・やはり個人のレベルには差があつて、「基本的すぎる」と授業のレベルに満足できない学生や単位を認定してもらうために出席しているだけの学生がどうしても出てくるので、教室の雰囲気が乱れがちで、そうした学生への動機付けがうまくいかなかった。

③同科目についての改善案

- ・すべてを基礎講座でフォローすることはできないと思うので、文章表現・論理的思考・情報処理などの基本的スキルを身につける講座と連携をとりつつ、それらのスキルを大学での学習に生かせるよう導いていく講座として基礎講座が機能することができれば理想的だと思う。

○担当者B 人間関係学部（人間関係学科）・短期大学部担当

①大学基礎講座Ⅰ・Ⅱについて、指導内容で不十分と感じられるところ

<基礎講座Ⅰについて>

- ・学部間で文章能力に偏りがある。大学（人間関係）と短大（生活デザイン）で同じレポート課題を同じ採点基準で行うのには無理がある。

<基礎講座Ⅱについて>

- ・学生がもっている既存の枠組みに限定されたプレゼンテーション技法での発表が多かった。
- ・先入観をもたせないために発表の例示は避けていたのだが、ある程度の技法の例示が必要であったと考える。

②同科目の授業展開において不十分だと感じられた点

<基礎講座Ⅰについて>

- ・レポート内容を見る限りでは、情報ソース明示の重要性が学生に理解されていなかった。
- ・クラス分けされてからの初回・2回目は遅刻者が多く、先行オーガナイザーとしての「今日の目標」が十分に把握されていなかった。

<基礎講座Ⅱについて>

- ・班によっては、メンバー間で積極性に大きな開きがあった。

③同科目についての改善案

<基礎講座Ⅰについて>

- ・学部間での能力差

→学部によって説明方法や採点基準を変える

(学生にフィードバックする得点は共通で構わないが、最終評価における傾斜配点を行う)

- ・情報ソース明示の重要性の伝達

→「レポートの書き方」の回で、引用やリストに関する説明の比重を重くする。

- ・遅刻者について

→掲示確認への注意を促す。授業の目標を1授業内数回にわたって伝達する。

<基礎講座Ⅱについて>

- ・班活動への適度な介入 (難しいところだが…)

○担当者C 人間関係学部(人間関係学科)担当

①大学基礎講座Ⅰ・Ⅱについて、指導内容で不十分と感じられるところ

<基礎講座Ⅰについて>

- ・最初がノートのとり方から始まるため、意識の高い学生からはなぜこんな内容をわざわざ講義で扱わないといけないのかという反発がある。(ただし、この点については、口頭で解説した内容をノートにまとめるという作業を行うことによって、だいぶ改善されていると思う。)

- ・図書館の利用については、概ね好評であるが、個人的に図書館をよく使用している学生にとって不必要な内容になっている。

- ・OPACや他の検索サイトなどの使用の説明が、実際操作できないため、わかりにくい。

<基礎講座Ⅱについて>

- ・ブレインストーミングの内容が、京都のイメージを考えると、あまり具体的な案を出すようなものではないので、ブレインストーミングのよさを実感できるものになっていない。

②同科目の授業展開において不十分だと感じられた点

<基礎講座Ⅰについて>

- ・必須科目になっている学科を扱っているため、全員のモチベーションが高いわけではなく、とりわけレベルの高い学生(基礎講座で扱う内容はほぼ常識であるととらえている)に対しての、動機づけが難しい。

<基礎講座Ⅱについて>

- ・班発表の内容が、どの班も似たようなものになり、おもしろいアプローチをする

ような班がみられなかった。内容の決定について、どれくらい介入すればよいのかの判断が難しい。

③同科目についての改善案

<基礎講座Ⅰについて>

要約をする、レポートを書くといった作業の前に、正しい日本語で文章を書くということ自体に問題のある学生も多いため、文章指導のようなものがあったら良いと思う。

○担当者D 人間関係学部（社会福祉学科）担当

①大学基礎講座Ⅰ・Ⅱについて、指導内容で不十分と感ぜられるところ

<基礎講座Ⅰについて>

- ・レポートの内容面。書式としては整ってはいるものの、自分の意見としてまとめるというところが不十分。（レポート採点基準「自分の意見」のパートが低い）
- ・引用の仕方も理解できていない、不適切な書き方のままの学生がいる。
- ・添削して返却する機会が実質1回だけなので、間違った理解のままの学生がいる可能性があるのが、非常に気になる。
- ・また、他の授業のレポート作成にいかされていないことがある。

②同科目の授業展開において不十分だと感ぜられた点

<基礎講座Ⅰについて>

- ・上記に含まれるが、それ以外としては、レポートや試験などの出題意図の解釈について授業内容を踏まえた内容を書くべきものと、そうではなく発展的な内容を含むものと具体的な例をいくつか挙げて説明したつもりだが、学生の方はあまりわかっていなかった。
- ・また、レポートを書く準備として、カードの活用が教科書にあるが、1回生の段階ではあまり現実的ではないので説明をかなり省略した。

③同科目についての改善案

<基礎講座Ⅰについて>

- ・いきなり長い意見文をレポートとして書かせるのではなく「短い意見文を書かせる」から始め、少しずつ長い意見文を書かせる。学生が書いた「短い意見文」をすべてプリントにして学生に採点・評価させる、あるいは、討論させる。可能であれば「添削→書き直し」を繰り返して練習させたい。

○担当者E 人間関係学部（人間健康学科）担当

①大学基礎講座Ⅰ・Ⅱについて、指導内容で不十分と感ぜられるところ

## &lt;基礎講座Ⅰについて&gt;

- ・指導内容としては、現在の時点でかなり十分であると感じる。さらに、「学生にとって、当面（大学1回生）の大学生生活を送るうえで必要である内容」かつ、「『大学で学んだ』ということが、学生の将来（生涯発達）において重要な意味をもつように支援する内容」を、明確にし、両方の目的が達せられるような内容であればと思う。
- ・例えば、例年、「レポートの書き方を早く取り上げて欲しい」という学生からの感想があるが、その背後に、未知の大学生生活に直面することへの不安と（「果たして私はうまく大学でやっていけるのだろうか」）、目的に直行する安易な姿勢（「要するにレポートが書ければ単位が取得できるので単位を効率よくとるために、レポートの書き方を早くしてほしい」）との両方を感じることが多い。不安を取り除きつつ、「授業に出席して試験を受けてレポートを書いて単位をとるということだけが全てではない」ということが伝われば、と思う。
- ・あともう1点、不十分と感じられるのは、担当学科の専門教育にうまくつながるような基礎をつくることができているのか、という点である。昨年度レポートの書き方で、「実験レポートの書き方も教えて欲しい」という感想があったときには、どこまで人間健康学科の授業に踏み込めばいいのかと思った。

## &lt;基礎講座Ⅰ・Ⅱについて&gt;

- ・ⅠとⅡ、共通して、「情報収集とそのまとめの方法」という内容があってもいいかもしれない。（「図書館の利用」でカバーできているかもしれないが）。
- ・Ⅱの授業で、特に今年度・昨年度と、あまりにもインターネットからの情報を吟味せず安易に利用しているのが危険だなと思った。

## ②同科目の授業展開において不十分だと感じられた点

## &lt;基礎講座Ⅰについて&gt;

- ・Ⅰの授業では、「テキストの読み方」で「うまくいかない」と感じることが多いような気がする。学生の興味関心をひきつけておくことがどうしてもうまくいかない。原因はなぜか考えて毎年反省しているが、授業中の私がどうしても空回りしているような気がする。（それでも「効率のよい読み方がわかってよかった」という感想はあるが、授業後に私自身が「うまくいかなかったな」と思うことが多い）
- ・「図書館の利用」は、私自身も知らないことが毎年出てくるので勉強しているが、それでも私自身が勉強不足だなと思う。そして、あまりに多くの内容を学生（大学1回生の6月）に伝えてもわかりにくいだろうな、とも思う。今年度は図書館ツアーなどして、図書館の方と連携ができたのでよかったのではないかな。
- ・レポート採点は毎年うまくいっているかどうか。文章の添削と指導を私自身がき

ちんとできているか、という日本語の文章指導の問題がある。

### ③同科目についての改善案

#### <基礎講座Ⅰについて>

- ・Ⅰについては講義の中に実践的な要素を取り込んで具体的にわかるような仕組みがあればいいと思う。
- ・「ノートのととり方」で、聞き取って実際にノートを取ってみる課題で「思ったよりノートを取れなかった」という感想が多かったので、「できると思っていたことでもやってみると意外にできなかったのだからなんとかせねばならない」という実感を持たせることができたと思う。

#### <基礎講座Ⅰ・Ⅱについて>

- ・また、改善案とは少し異なるが、2～4回生と学びをすすめるうえで、大学基礎講座の授業がどのように役立っているか(あるいは役立っていないのか)、と思う。Ⅱは印象に残っている学生が多いようだが、具体的に、学びのスキルを生かしてくれていればいい、と思う。

### ○担当者F 短期大学部担当

#### ①大学基礎講座Ⅰ・Ⅱについて、指導内容で不十分と感じられるところ

##### <基礎講座Ⅰについて>

- ・前期と後期で、それぞれうまくカリキュラムが組まれているので、大きな問題は感じなかった。ただ、前期については、2度にわたって提出されるレポートを読むと、学生たちは、「論理的な文章を書くことに慣れていない」ことを強く感じる。
- ・また、2回生に進学した後の授業で、彼女たちが提出するレポートを読むと、1回生のときに「大学基礎講座」で習ったはずのレポートの書き方が生かされていない(忘れてしまっている?) ことを感じる。
- ・したがって、「大学基礎講座の指導内容が不十分というわけではない」が、学生の理解度を考えると、「論理的な文章の書き方」や「レポートの書き方」にもう少し時間を用意できると望ましいのではないかと感じる。

#### ②同科目の授業展開において不十分だと感じられた点

##### <基礎講座Ⅰについて>

- ・前期のみ短大クラスを担当している。約60人ぐらいの履修者がいるが、毎回の授業で後ろの方に座る学生たちは、「私語がかなりひどくなり、前の方に座る学生たちの妨害となっている」。したがって、短大クラスは、もし可能であれば30人ぐらいで一クラスを構成できるようになると望ましい。



③同科目についての改善案

<基礎講座Ⅰについて>

- ・①で記したように、「論理的な文章の書き方」などにもう少し時間を用意できると望ましい。
- ・「ノートの取り方」の授業回数を1回にまとめたり、「小説をどう読むか」の回を省略しても良いのではないか。
- ・そのかわりに指導する内容として、たとえば「接続詞の使い方」のトレーニングなどが有益かと思われる。学生のレポートを読んでいると、接続詞の使い方がわかっていないことが多いことに気づく。これを正しく使い分けられるようになると、文章の論理性が飛躍的に増すのではないかと考えている。
- ・また、経験的にもわかることかもしれないが、教育心理学では、一般に「集中学習」より「分散学習」が望ましいとされている。したがって、上記のようなトレーニングを用意するとしても、1回の90分の授業で集中的に学習してもらうよりは、毎回の授業の最後に10分ぐらい用意して、毎週例題を考えてもらうというように、分散して学習してもらう形式の方がより望ましい。